

発表題目：

共生を可能にするのは語ることか沈黙か
日本の性被害女性の日々のコミュニケーションを事例に

所属： 広島大学人間社会科学部研究科

氏名： 井上瞳

1200 字程度で発表内容を記載してください。

本報告は、日本の性被害女性の日々のコミュニケーションを事例として、「沈黙」の捉え方を再考することを目的とする。本報告は、国内の性暴力被害者支援グループに参加する女性たちと共に実施した聞き取り調査の成果に基づく。

性暴力とトラウマに関する議論は、1960 年代後半にアメリカで起きた第二波フェミニズム運動をきっかけとする [Herman 1992]。性暴力がもたらす心理的余波は 20 世紀以降ヒステリーなど狂気とみなされてきたが、ベトナム戦争帰還兵の心身状態との共通性を指摘することで、1980 年には PTSD という診断名と結びついた。アメリカ、イギリス、カナダ、オーストラリア、ニュージーランドなど女性運動が活発に展開された地域では、「語る／告白することで癒す」というテーゼに基づき、ワンストップ支援センターの全国展開やトラウマ治療の技法開発が急速に進行した。2000 年代に入ると、専門家や周囲への性被害の開示は社会資源を確保するのみならず、PTSD の発症や重症化を予防する対処法の一つとして数えられている。こうした社会的背景のもとに、英語圏の精神医学・心理学的研究は主体性や能動性に言及しながら、関係性を構築する技法としての語ることの重要性を指摘しており、沈黙は関係性からの撤退や消極性と結びつけられてきた。

このような英語圏の展開に対して、日本は 1990 年代以降精神医学・心理学の領域の PTSD 治療に関する研究を積極的に受容してきた。その結果、たとえば支援機関や専門家に開示しないことは、治療すべき症状と結び付けられる傾向がある [Cahill & Foa 2007]。これら研究は性被害当事者をいかに支援機関につなげるかという問いに貫かれておりその重要性は揺るぎないが、本報告はこの点を踏まえたうえでそうした見方がとりこぼす領域を再検討する。

本調査の結果明らかになったのは、とくに家庭や職場で日々のコミュニケーションを可能にしていたのが沈黙であったということである。参加者の多くは複数の支援機関への回路をもつ。しかし他方で、行き先を言わずに支援機関に出かける、近しい人に性被害やトラウマについて話すことをあきらめるといった状況も存在する。このあり方を精神医学的にある種の兆候として理解することは可能かもしれない。ただしここで報告者が問題化したいのは、女性たちによるこれら沈黙の実践ともいえるべき事態が「実際に」他者との共生可能性を実現してきたことである。それは、従来の研究が想定している対話のような方法とは異なるが、日々の暮らしにおいて共生可能性を開いてきたのはむしろこうした沈黙の実践であったと考えられる。本事例が示唆するのは、語ることが決着をつける代わりに関係の断絶を招きうるのに対して、関係性を生み出し維持する沈黙の潜在的な力である。

Herman, J., 1992, *Trauma and Recovery: The Aftermath of Violence--From Domestic Abuse to Political Terror*, New York, Basic Books.

Cahill, S. P. and Foa, E. B., 2007, "Psychological theories of PTSD", In Friedman, M. J., Keane, T. M. and Resick, P. A. eds., *Handbook of PTSD: Science and practice*, New York, The Guilford Press.